

沖縄現地報告

《辺野古・大浦湾で進む埋立工事》

松本八重子



写真提供中村吉且さん

半年ぶりの大浦湾の様相に衝撃を受けた。日本で最初にホープスポットに指定された生物多様性の美しい大浦湾には、赤と白に塗り分けられた高い鉄塔様のものが林立している。この巨大な 3 本の櫓(リーダー)を持つ鉄塔様のものは、サンドコンパクションパイル(SCP)船と言い、大浦湾の軟弱地盤改良のために 7 万 1 千本もの砂杭を打ち込むために運ばれてきた。現在の日本の砂杭打ち込み技術は水深 70 メートルまでで、大浦湾の軟弱地盤で一番深いところは水深 90 メートルと言われている。今まで経験したことがない地盤改良工事となるため、SCP 船も改良を加えなければ使えないようだ。さらには、この砂杭を打ち込む前には海底部に砂を敷く必要がある。昨年末、防衛局は埋立工事が着々と進んでいるように見せるため、形だけの敷き砂作業を行った。しかし、この敷き砂作業を行うトレミー船は一カ所に留まっており、順調には進んでいないようで、SCP 船の 6 隻のうち現在稼働しているのは 3 隻のようだ。

また、砂杭の打設作業では軟弱地盤から泥が出るために汚濁防止膜を張ってはいるが、海全体の濁りを防ぐことは到底できず、大浦湾で暮らすたくさんの生物たちは潰され、死滅の道を辿っている。

さらには、沖縄の年間海砂使用量の 3～5 年分を必要とする敷砂・砂杭・中詰等の砂の調達にも難航しており、名護市の安部では海砂の採取のため、浜から砂が流出し、海岸線の後退が始まっている。沖縄滞在中に観たドキュメンタリー映画「太(テダ)の運命」は、沖縄の自立を求め、日本政府と激しく



対峙した二人の知事の苦悩と闘いを描く。1995 年の米兵による少女暴行事件をきっかけに、大田知事は不平等な「日米地位協定」の見直しを日米両政府に強く求めた。翌年には、当時の首相から「普天間基地全面返還」の言葉を引き出したが、県内移設が条件となっていたため実現できず、それが「辺野古移設問題」の発端となった。前知事の辺野古埋立承認に反対し移設阻止を掲げて当選した翁長知事は、承認の取り消しや撤回などで国と対峙。裁判闘争を繰り返し、沖縄県知事では大田知事に続き国から訴えられる知事となった。

辺野古新基地建設とは、戦後 80 年経って今も続く沖縄を犠牲にしたアメリカ追従の外交防衛政策のいきつく果てである。沖縄の人々が何度怒りの県民大集会を開こうとも、県民投票で辺野古新基地建設反対の民意を示そうとも、「辺野古が唯一」を繰り返すばかりの日本政府に対し、「沖縄を二度と戦場にしない」と、声を上げ続ける人々が今日も辺野古で座り込んでいる。(2025/3/31)



＜辺野古バスカンパお願い＞

沖縄平和市民連絡会では、那覇・辺野古行きバスを運行しています。バス運行のためのカンパを募っています。

カンパの宛先は、郵便振替

口座番号:01710-5-88511

加入者名)平和市民連絡会

※『通信欄に辺野古行きカンパ』と明記。

他金融機関からの振込用口座番号は

一七九(イチナナキュウ)店(179)

当座 0088511 です。

※詳細は「平和市民連絡会」HP で確認できます。

www.jca.apc.org/heiwa-sr/jp/